

論文内容の要旨

報告番号		氏名	榎本 泰典
A comparison of epidermal growth factor receptor expression in malignant peritoneal and pleural mesothelioma 腹膜および胸膜悪性中皮腫におけるEGFR発現の比較			

論文内容の要旨

[背景]悪性中皮腫は、胸膜や腹膜、その他中皮細胞から発生する悪性腫瘍であり、近年その頻度は過去のアスベスト使用により急増しているが、有効的な治療はなく予後は不良である。肺腺癌などの上皮系悪性腫瘍では、EGFR(Epidermal growth factor receptor;上皮成長因子受容体)に対する分子標的薬の適応に関してEGFR染色体数および変異検索が行われているが、悪性中皮腫のEGFRは、蛋白の過剰発現があることが報告されるものの、EGFR遺伝子に関する報告は少なく又その遺伝子変異についてはなかったと報告されるものが多い。一方、近年腹膜悪性中皮腫に一部EGFRの遺伝子変異があったとの報告もあるが、未だその関連については不明な点が多い。今回、我々は胸膜および腹膜発生悪性中皮腫においてEGFRの発現を免疫染色法と遺伝子増幅をFISH法にて検討した。[方法と対象]悪性中皮腫38例(胸膜22例、腹膜16例)の、ホルマリン固定パラフィン切片を用いて、EGFRの免疫染色およびFISH法を施行した。[結果]悪性中皮腫では、EGFRの免疫染色において、全体の20/38例(53%)に陽性を示した(胸膜:11/22例(50%)、腹膜:9/16例(56%)。EGFRの発現例では細胞膜への染色性が、反応性中皮に比較し強くみられた。FISH法では、EGFRの遺伝子増幅が確認されたのは胸膜悪性中皮腫のうちの1例のみだった。[結語]悪性中皮腫において免疫組織学的検索によりEGFRの発現が比較的高頻度にみられた。EGFRの蛋白発現と遺伝子増幅に相関はなく、臨床病理学的因子にも関連性はなかった。中皮腫においてもEGFRに対する分子標的薬の有効性の有無を予測するためには、今後、症例数も増やし、またさらにEGFR遺伝子変異の有無についても検討していく必要がある。